

2024年3月
篠塚 徹

短期大学という存在

(はじめに)

私は、拓殖大学北海道短期大学（以下、「北短」と略称）の学長を14年間（2009年4月～2023年3月）務めた。大学、なかんずく短期大学を取り巻く厳しい経営環境のなかで苦しい困難な局面は常態化していたが、反面若人の教育を通じて非常にやりがいのある日々を過ごしてきた。学長退任後の現在、自分の経験を基に改めて短期大学という存在について考えることが本論の目的である。

在任中、私は新聞社、月刊誌、受験情報誌などから数多くの取材を受け、また北短の学生、教職員、地域の人々にも多くのメッセージを発信してきた。これらの取材やメッセージのなかに、時々状況を踏まえた私の思いが込められており、本論考を書くに当たってその土台となった。

1 短期大学（以下「短大」と略称）の成り立ちと盛衰

日本の短大は1942年の学校教育法の施行に伴い、旧専門学校が新制大学に移行する際に誕生した。旧制専門学校のなかに大学の設置基準に満たない学校が発生し、これらの学校を暫定的に大学とは異なる短期大学という教育機関として定めたことが短大の始まりである。このように短大はそもそも暫定的に定められた教育機関であったが、その後女子教育を中心とした教育需要によって飛躍的な発展を遂げた。このため、1964年の学校教育法改正の際には、短大は独自の目的を持つ教育機関として恒久的な制度となった。

学校教育法に定められている短大の目的は、「深く専門の学芸を教授研究し、職業または実際生活に必要な能力を育成する」（第108条）ことであり、設置されている学科には、家政、教育、保健などの専門分野に特化した分野が多く、保育士、養護教諭、看護師など女性の多い職業に関する学科が多く設けられている。そのため、女子学生の割合が高い。

短大が4年制大学とは異なる大学として正式に制度化されたのは1950年で、公立17校、私立132校、計149校でスタートした。短大は、教養教育と実務教育を兼ね備えた短期間の高等教育機関として、とくに女子高校生の進学先として重要視され、急速に設置数を増やしていった。短大数は、1965年369校、1975年513校、1985年543校となり、ピーク時の1996年には598校に達した。しかし、その後は少子化の進行や女子の4年制大学志向などの理由により短大数は年々減少し、2023年には公立15校、私立285校、計300校にまで減少し、ピーク時に比べて半減している。

北短は短大数が増加の一途を辿る1966年に誕生したが、教育環境の変化に伴って他の短大と同様に定員数が多大の影響を受けて近年は定員数の削減と定員割れが続いている。

近年においては、短大数の減少と軌を一にして定員割れの短大が多くなり、学科の募集停止や4年制大学への移行を含む大学自体の閉鎖が相次いでいる。

2 北短の軌跡

(1) 沿革

1966年4月、北海道拓殖短期大学という名のもとに、深川市納内地区において開学した。農業経済科が設置され、定員は100名であったが、107名の入学者を迎えて順調に滑り出した。

1967年4月に第2部（後に第2群と改称）が開設された。農業後継者の農閑期（11月～3月）を利用して3年かけて教育し短期大学卒業と認定する制度であり、理論と実践を有機的に組み合わせた教育であった。志願者の数は多く、入学者の年齢幅も広く、40代で家族持ちの学生も含まれていた。この制度は1989年まで23年間続き、ピーク時には150名を超える入学者（1975年）があったが、志願者減に加えて文部省（現文部科学省）の意向もあり、1900年度に学生募集を停止した。

1969年4月拓殖保育専門学校が付設され、定員50名に対して59名の入学者があった。開学前から女子教育のための学科設置の強い要望が地域からあり、将来の本学内学科を見据えての専門学校設置であった。この政策を受けて1980年4月には北短保育科が誕生した。この保育科新設を契機に、定員を50名から100名に増加させた。この結果、北短全体の定員は農業経済科の100名と併せて200名となった（2群を除く定員、以下同じ）。

1990年4月に校名が変更され、現行の拓殖大学北海道短期大学となった。開設時の校名（北海道拓殖短期大学）では、端的に拓殖大学の設置校であることを示しにくいことが、変更の理由である。

北短の地理的便利性とキャンパスの狭隘さを理由に北短の納内からのキャンパス移転が検討されていたが、移転先の候補地のうち同じ深川市の特筆すべき好条件を受けて、1992年4月に深川市メム地区に移転した。新キャンパスは納内地区の5倍の広さで、建物は旧校舎の2倍の広さとなった。屋外施設は農業用温室、実習棟、農機具庫が並びその西側に実験実習農場が広がった（キャンパス全体は約16万平方メートルで、そのうち実験実習農場は4万平方メートル）。

2000年4月に、2学科体制（農業経済科、保育科）から3学科体制（環境農学科、経営経済科、保育科）に移行した。定員は環境農学科80名、経営経済科150名、保育科50名、計280名であったが、入学者は303名という好成績であった。

2014年4月に新2学科体制が発足した。環境農学科と経営経済科を統合して農学ビジネス学科とし、そのなかに環境農学コース（定員70名）と地域振興ビジネスコース（定員150名）を置き、保育科を改称した保育学科（定員60名）と併せて合計230名の入学定員とした。2000年から実施された3学科体制においては、2004年度まで定員を上回る

状況を呈していたが2005年度からは毎年定員割れを喫する状況となった。この改革は経営経済科の過度な拓殖大学不合格者受入れと過度な拓殖大学への編入学依存体質を改め、北短を卒業してもすぐに社会の要請に応えて就職できる人材の育成に努めることが目的であった。

2016年に北短は創立50周年を迎え、11月5日盛大に記念式典と祝賀会が挙行された。

しかし、2014年の新学科体制の下でも北短の定員割れは続いた。そのなかにあっても、2018年度から2020年度にかけては定員に近い数の入学者を迎えたが、これは皮肉にも拓殖大学不合格者の受験者が急増したことによるものであり、2021年度からはその要因が薄れ、入学者が急減し続けている。

(2) 農業セミナーと拓大ミュージカル

農業セミナーは北短開設翌年の1967年から始まり、毎年度1回公開形式で開催されている。毎回共通テーマの下で外部から数人の講師を招聘して基調講演や報告を受け、パネルディスカッションを行っている。2023年度までに57回開催され、北短において最も息の長い地域連携型のセミナーである。

共通テーマは開催時の農業をめぐる状況を反映しており、興味深い。適宜ピックアップしてみよう。第1回(1967年8月)農業法人と協業化、第4回(1970年8月)転換期の農業と農協、第7回(1973年8月)食糧問題と日本農業、第11回(1977年8月)地域農業の振興と農業者の役割、第15回(1981年8月)農業機械化の諸問題、第18回(1984年8月)農産物の生産調整とその展望、第21回(1987年8月)これからの北海道農業－自由化攻勢にどう立ち向かうか－、第27回(1993年12月)今年の冷害－その原因を探る－、第32回(1998年12月)クリーン農業実現への道、第35回(2001年12月)地域の新しい農業に対するチャレンジ、第38回(2004年12月)花を多角的に考える、第40回(2006年11月)クリーン農業の現状と将来－環境と人と作物に優しい農業を目指して－、第45回(2011年12月)誰が農業を担うのか?!－担い手の世代交代－、第47回(2013年12月)地域活性化は農業の第6次産業化から、第50回(2016年12月)地域の活性化は革新的農業から－北海道農業の可能性－、第54回(2020年12月)私の経営戦略－全国・北海道で活躍する北短女子卒業生－、第55回(2021年12月)北短の教育と私の経営戦略－全国・北海道で活躍する北短男子卒業生－、第56回(2022年12月)農業・生活と野生動物

拓大ミュージカルは1985年3月に有志によって「子どものためのオペレッタ」としてスタートした。翌年の第2回からミュージカルと名称を代え、毎年原則として2月に公演を行い2024年2月には第40回の公演を行った。コロナ禍の下で公演が危ぶまれた年もあったが公演日数と観客数を減らすなどの工夫を重ねて危機を乗り越えた。当初は保育科(現保育学科)の学生主体の公演であったが、間もなく他学科の学生も積極的に参加する北短全体の取り組みとなった。毎年のように満席の会場を熱気で包み込み、NHKのドキュメンタリー番組でも取り上げられた。ミュージカルは、演出、演者、舞台美術、衣装、

音響、照明、進行、事務局など多くの役割の者が結集して生み出す総合芸術であり、まさに全人教育の場でもある。

この拓大ミュージカル活動は、脚本・作詞・作曲・音楽を担ってきた土門裕之氏が専任講師として北短に着任した年から始まった（同氏は後に教授・副学長を歴任）。土門氏が2020年3月に退職したこともあり、それ以降（第37回以降）の演題は、すべて再演または再々演となっている。また、公演会場の定番は深川市であるが、機縁があって札幌市、恵庭市、旭川市、鷹栖町を会場としたこともある。

近年の演題は、次の通りである。「泣かないで」（第21回）、「メッセージ」（第22回、第27回、第35回、第40回）、「いつまでも忘れないから」（第23回、第25回、第29回、第33回、第38回）、「捨てられた人形の詩」（第24回）、「時の旅人～僕が待ち続けた時間～」（第26回、32回、第37回）、「ふたつの空」（第28回）、「ホテルの奇跡」（第30回、第36回）、「旅する小舟」（第31回、第34回、第39回）

(3) 拓殖大学国際学部農業履修生の受け入れ

拓殖大学各学部と北短の連携関係は多くあるが、特筆すべきは農業履修に関する拓殖大学国際学部と北短農学ビジネス学科環境農学コースとの連携である。国際学部国際学科は北短環境農学科（当時）の農業授業に関心を持ち、2009年から2011年度まで希望学生を半年長期研修として環境農学科の授業を実地に学ばせた。次いで、2012年に国際学科に農業総合コースを開設し、このコースの3年生が北短環境農学科（2016年から農学ビジネス学科環境農学コースに改編）において半年ないし1年間授業を受ける制度が始まり、現在に至っている。多い年で38名が受講し、毎年20名～30名程度の学生が受講している。

(4) 入学定員の変遷

1966年度～1979年度（1科体制）100名、1980年度～1981年度（2科体制）200名、1982年度～1986年度（2科体制）250名、1987年度～1999年度（2科体制）210名、2000年度～2013年度（3科体制）280名、2014年度～2023年度（3学科体制）230名

(5) 入学者の推移

2009年度190名、2010年度197名、2011年度214名、2012年度206名、2013年度181名、2014年度188名、2015年度173名、2016年度186名、2017年度194名、2018年度217名、2019年度217名、2020年度213名、2021年度166名、2022年度97名、2023年度84名

3 地域に根ざす北短ーその存在意義と内実

北短は、開学以来「大地に学び地域とともに歩む」ことをモットーに、実践的な知識や技術と豊かな人間性を兼ね備えた広く社会の発展に貢献できる有為な人材を育成してきた。しかし、近年本論1で指摘したように全国の短大全体に逆風が吹き荒れ、募集停止や短大自体の閉鎖のような事例が相次いでいる。北短の入学者推移で明らかのように、北短もその例外ではなく苦境に立たされている。

短大は4年制大学に比べ短期間に基本となる教育やより専門的な分野を深く学ぶことができ、修了時には「短期大学士」の学位を取得することができる。また、地方にある短大は専門分野に特色を置くとともに、より地域と密接な関係を構築する必要がある。文部科学省は短大のあり方について危機感を強め、大学教育部会短期大学ワーキンググループでは、「短大は地域に密着した高等教育機関として一定の役割を担っており、地方都市における短大においては、今後さらに地域に密着した高等教育機関としての機能が不可欠だ」としている。これらの観点から、私は学長として新聞・雑誌のインタビューを通じて、次のことを強調してきた。

「北短は開学以来3本の柱（農業、経済、保育）を有しているが、各学科とも充実した実習・演習科目を揃え、実践教育を旨とする北短にふさわしいカリキュラム体系となっている。北短は地方にある大学としての利点を遺憾なく発揮しており、地域の理解を得て、学生たちは積極的に街に出ている。夏まつりや商店街の活性化イベントなどの催しに企画段階から参画し、イベントそのものにも積極的に参加している。複数の特定科目を設けて地域社会に貢献できる人材の養成を目指している。地域の多様な行事に企画段階からスタッフとして参画し、実践も行う演習である。また、特定科目の一部を使って、地域活動に関わりのある学外の有識者や実践者を招聘して地域特別講座「地域と産業」というテーマのもとで講義をしてもらっている。さらに、農場公開デー、農業セミナー、保育セミナー、農業実習、保育実習、保育園・幼稚園での実演などを通じて、地域のさまざまな人々と交流している。地域の諸機関や人々とも濃密な関係を築いている。市役所、商工会議所、農協や地域の一般市民に至るまで、北短は良好で親密な関係を維持している。大都市における大学では考えられないプラス面である。小規模な短期大学であるが故に、学生同士、学生と教職員との関係が近く、カリキュラム上の工夫を背景にして、協調性が養われ、対外発信もし易い。“明るく元気に、挨拶を”というモットーのもとで、相手が誰であれ、笑顔で挨拶を交わす光景が常に見られる。」

ただし、このような新聞・雑誌インタビューで強調した点を確実に実施するために、私は北短教員向けに再三次のようなメッセージを出している。次に示すメッセージは、いずれも各年度初めに学長としての私が教職員に発出したものの抜粋である。

「時には大学と自宅の間を迂回してください。わが大学は縁あって深川市に居を定めていますが、地域あってこそその大学です。大いに街に出て、地域の多くの人々と会話し、世間の風を肌で感じてください。この“地域”を小さく採る必要はありません。空知全体、上川全体、北海道全体でも構わないのです、いずれにせよ、伝書鳩のように職場と自宅を最短距離で往復するだけでは、生きた教育の材料を得ることはできません。」

「学内での行事や地域における各種イベントに、学生たちが積極的に参加する機会が多くなってきました。その際に、学生を教員主導で引き込むことは止めてください。学生が“先生に言われたから参加する”と思っていたら、形のうえでは“参加”であっても、教育効果が上がりませんし、学生の成長も知れたことです。これを避けるためには、それぞれの行事

やイベントがどういう目的や意義を持ち、参加することがどういう意味を持つかということを示す、いわば“企画書”が必要です。そうすれば、学生は進んで自らの意思で参加することができるのです。このように主体的に参加した学生は、行事に参加してもさらなる創意工夫を提案するかもしれませんし、参加の域を越えて参画するという実感を持ち得ます。」

「大学外で交流するためには、まず学内の足元を見ることが必要です。コース内や学科内の教員同士が頻りに話し合い、協力関係を作り上げなければなりません。これは学科会議やコース会議を指しているものではありません。もちろんこれらの公的な会議も重要ですが、何か相談したいことがあれば、廊下での立ち話も含めて、急遽話合うのです。帰りがけに数人で飲食を兼ねながら話をすることがあっても良いですね。日頃から教職員同士が胸襟を開いて往来していれば、学外の人々との交流は自然にできます。高校の先生方との関係も構築できます。公式の場で硬い表情で名刺を交換するだけでは、お互いの信頼関係はできません。日頃の学内での足元がしっかりとしていれば、外部における人的ネットワークは容易に形成できると思います。」

「本学を今日まで存続させてきた多くの先輩や卒業生の労に報いるためにも、実のある行動が必要です。ただし、眉間にしわを寄せて難しい顔をするのは厳禁です。爽やかな笑顔と挨拶を身につけて行動することが、受験生を惹きつけ、結果として魅力に満ちた大学になると確信しています。」

「地域あってこそその本学です。大いに街に出て、地域の多くの人々と語り合い、世間の風を肌で感じる。 “大学の常識は世間の非常識”であってははいけません。学内において、学科・コースの枠や教員と事務職員の枠を飛び越えて日常的な交流を図り、風通しの良い職場にすること。お互いに考え方や意見の相違があるのは当然ですが、それを人間関係に及ぼしてはいけません。自由で闊達な雰囲気の下で行う仕事は、能率的で質の高い結果を産み出します。」

「本学が“地域に愛される大学”であり続けるためには、コロナ禍終息後、教職員の皆様が、大いに街に出て、地域の人々と語り合い、街の匂いを嗅ぎ、色を観察し、食を味わうことが大切です。この際、地域を狭く捉える必要はありません。皆様が住んでおられる街も地域の圏内です。このように、絶えず地域の風を肌で感ずるように心がければ、“大学の常識は世間の非常識”の誹りを受けないでしょう。」

「私は対外的に本学の強みとして“農業系、経済系、幼児教育系の有機的連携”を挙げていますが、このことは単に共通科目の設定などカリキュラム上の連携だけを示しているわけではありません。専門分野を超えて先生方が交流し、ときに一つの目的に向かって協力し合うことをも含んでいるのです。この意味では、本学は未だ教職員が一体となって協力し合う状況にはなっていません。これは体制や制度の問題ではなく、教職員一人一人がその気にならなければ実現しない問題です。この小さい大学においては、大規模な大学よりもはるかに部門等の壁を越えて意思疎通を図り、一丸となって協力し合う場を創りやすいは

ずです。確かに人々の性格や感情はさまざまに異なり、無意味な同調は無用です。しかし、対外的に協力し合う場で自分に壁を作らずに一致協力する意思がなければ、生き残りをかけた熾烈な競争社会では敗者になることが必然です。みんなで協力し合って難局を開するという面での弱みを大幅に改善することができれば、本学の伸びしろはまだ残されています。」

新聞・雑誌インタビューにおいては北短教育の特色を述べ、その利点について語っているが、実際には必ずしも対外的に明示している特色通りではなかった。そのため、少しでも明示している特色に実態を近づけるように、上述のメッセージを教職員に発しているのである。まず、学生が夏まつりや商店街の活性化イベントなどの催しに企画段階から参画しイベントそのものにも参加しているのは事実であるが、その参画・参加段階において教員が強く誘導している場合が多いので、教職員メッセージにおいて企画書を学生に示すことによって学生が自主的/主体的にイベントに参加する環境を作ることを促してきた。

次に、さまざまな機会を通じて教員が地域の多様な機関や人々と交流しているかと言うと、必ずしもそうではない。交流に積極的な教員が多数居る一方、交流に消極的な教員もそれなりに存在している。このような教員は学内においても公式会議以外の行動が閉鎖的になりがちで、私は学内学外で教員が柔軟に軽やかに行動することを求めてきた。農業系、経済系、幼児教育系の有機的連携にはカリキュラム上だけではなく、教員の普段の行動も大に関わっているのである。

私は、教授会で、ある冊子（日本私立学校振興・共済事業団加入者向け広報誌）に掲載されていた「笑いでストレス解消」という記事を紹介して、「笑い」が病気の予防や改善に効果があり、笑っていると周りの人にも伝染して他人も笑顔になる伝染効果をもたらすことを強調したことがあった。これは、教授会等の会議の場で眉間に皺を寄せて難しい顔を終始崩さない教員が多数居ることを見かねて行った行為である。難しい顔が学内の廊下を歩くときや学外で人と会うときにも継続されると、つい挨拶も忘れがちになる。そこで、教職員向けメッセージで、爽やかな笑顔と挨拶を身につけて行動することが、受験生惹きつけ、魅力に満ちた大学に繋がることを力説したのである。

私は、メッセージで「本学は未だ教職員が一体となって協力し合う状況にはなっていません」と言い切っているが、残念ながらこれには数々の実証がある。全学的な催しである拓大ミュージカル公演や各種イベントにおいて、直接関係の無い教職員でも多くの人々ができる範囲内で協力的であるが、まったく関心を持たない教員が少なからず居ることも事実であり、実践・実学を標榜する短期大学だけに彼らの自覚と奮起を再三促した。

私は在任中「地域あってこそその本学」であり、「地域に愛される続ける大学」の重要性を終始力説してきた。そのため、外部から見て大学の内部がよく分からず、大学を独自のルールに基づく特異で世間から隔絶した場と捉えられることは絶対に避けなければならない。「大学の常識は世間の非常識」であってはならないのである。本学は教育と研究を旨とする場であることは当然であるが、地域に在る短期大学に対して文部科学省が地域に密

着した教育機関であることを求めていることを忘れてはならない。

これまで私は新聞・雑誌インタビューで示した北短の特色と良さを、できるだけその通りに実践するための努力をしてきた証しとして、教職員向けメッセージを引用して説明してきた。なお、私は在任中、教職員向けとは別に、学生向けと地域・一般向けに定期的に（年始、何度初め）メッセージを発出し、毎年北短卒業生にも定期報告を重ねてきた。いずれも、北短のときどきの状況を多様な立場の方々に知っていただくための行為であった。

（おわりに）

現実には厳しい。1の「短大の成り立ちと盛衰」において、「近年短大数の減少と軌を一にして定員割れの短大が多くなり、学生の募集停止や4年制大学への移行を含む大学自体の閉鎖が相次いでいる」と述べたが、北短も例外ではなかった。北短は、2024年2月28日に保育学科の学生募集停止を公表した。北短ホームページからその主旨を抜粋してみよう。

「このたび、学校法人拓殖大学は、設置校拓殖大学北海道短期大学の学生募集を2025年度以降、停止することを決定いたしました。保育学科は、1969年に現在の保育学科の前身となる付設保育専門学校として開校し、キャンパスが位置する北海道北部農村地域の幼児教育に携わる担い手養成と女子学生の進学機会拡大を使命として取り組み、これまでに多くの優秀な保育士・幼稚園教諭を保育の現場に輩出してまいりました。しかしながら、加速化する少子化と4年制大学への進学志向の高まりの中で、全国の短期大学は厳しい学生募集状況におかれ、特に地方にある教育機関はその影響を大きく受けております。本学の短期大学も例外ではなく、現状を打開するべく様々な努力を重ねてまいりましたが、入学定員を充足できない状況が続いておりました。こうした状況を踏まえつつ、学科存続に向けてあらゆる可能性を模索し、慎重に検討をした結果、誠に残念ながら最終的に今回の結論に至らざるを得ないところとなりました。」

そのうえで、

「農学ビジネス学科については、地域の高等教育機関として、そして北海道内唯一の農業系短期大学として、引き続き地域で活躍できる人材の育成に邁進してまいります。」としている。

保育学科は募集停止とするが、農学ビジネス学科は農系を中心に人材を育成し、北短自体は存続させるという趣旨である。現在農学ビジネス学科は環境農学コースと地域振興ビジネスコースとに分かれ、後者のコースは文系の人材を育成している。しかし、今回の決定は、農学ビジネス学科の重心を農系に置くという意味で、明らかに開学以来の新しい試みである。2025年度入学の学生向けカリキュラムは、抜本的に改定されるであろう。私は、2023年3月まで第12代学長を務めた者として、今後の北短の改革への歩みを特別の感情をもって注視していきたい。

以上